

幕末の剣豪達から 「劍聖」と仰がれた男

技の千葉(周作)に、力の斎藤(弥九郎)、位の桃井(春蔵)——。のちに、幕末の三劍士と呼ばれた劍客だが、その三人から「劍聖」と呼ばれた不世出の傑物がいた。それが男谷精一郎、その人だった。

別説あり、幕末の三劍士と呼ぶ時は右の三人ではなく、男谷精一郎、島田虎之介、大石進、もしくは比留間与八を指すのであって、男谷らは「天保の三劍豪」とも称されると物の本にある。

ともあれ……寛政十年(1798)、男谷新次郎信連の嫡男として生まれた精一郎信友は、八歳で本所亀沢町の団野源之進義高の直心影流を学び、十五歳で、四谷の地獄道場として知られる平山行蔵の兵原草蘆にも入門。平山は真貫流の劍術ほか柔術や砲術、さらには弓術、水術など武芸十八般を極める劍客として知られ、また学問では和漢の書物八千冊を読破し、武芸や城、兵器の図版にいたるまで数多く所有するという、異能で型破りな人物だった。

劍術各流派の多くが主に形稽古に専心し、他流試合を禁じていた時代

大石進種次。大石は身長七尺、物干竿といわれる五尺三寸の長竹刀を提げ江戸中の高名な道場に向いては、師範らに他流試合を挑み、江戸の錚々たる劍客を片端から打ち負かしていた。

その中には心形刀流の伊庭軍兵衛をはじめ北辰一刀流の千葉周作や庄司弁吉、また神道無念流の斎藤弥九郎ほか木村定次郎、秋山要助、鏡心明智流の桃井春蔵などの名もあつた。

ただし、千葉は樽の蓋を竹刀の鐔にして大石の突きを防ぎ引き分けたという漫画のような話と、千葉の一刀流中西道場修行時、寺田宗有、高柳又四郎と共に「中西道場の三羽鳥」と言われた高足、白井亨が小手を打って破ったとの譚もある。のちに寺田の起こした天真一刀流を継ぎ、さらに天真白井流を開く。心法による劍術を理想とし、実際に勝海舟が稽古を受けたおり、「神通力を備えている」と述べたほど不思議な劍技の持ち主だったようだ。

天保四年(1833)、いよいよ大石の長竹刀は精一郎と対峙。劍先を合わせるや否や大石必殺の突きが精一郎の喉元目にかけて飛ぶ。だが、精一郎は首を左右に振って躲し、あつ

に、平山の道場には「他流試合勝手次第。飛道具其外矢玉にても苦しからず」と墨した看板が玄関にドンと掲げられ、日々他流試合が行なわれていたという。

平山には逸話が残る。文化四年(1807)、ロシアが蝦夷や樺太を侵すなど、日本の鎖国制度は根底から揺れ動く危機に瀕していた。かねてから外夷を訴えていた平山は北辺防備についての建白書を幕府に提出。だが、内容は囚人を引き連れて自分が蝦夷に渡り、ロシア人を討ち滅ぼすとの過激なものだったから、さすがに幕府も取り上げなかった。

墓が語る 一大事

海照山増林寺

男谷精一郎

上泉信綱の流れを汲む直心影流の十三代目。宝蔵院流槍術、吉田流射術も極めた兵法者。他流試合を挑む相手に三本に一本は花を持たせた劍客。幕末の劍豪達をして、「強さ、底知れぬ」と言わしめた男。が、自意識の強い劍豪にありがちな派手さはない。度量大きく、温厚で飾らぬ人柄。よって人に好かれた。男谷精一郎とはそういう人物であった。



ほれ、

僕から一本取ったではないか

なんの!

あれは男谷殿の花じゃ

今一度、

手合わせをしてくだされ!

ふーむ、仕方あるまい

では、まいろうかの

うう……うううむ、

斬けぬ!!

さり退けた。敗因を徹底研究した大石は翌日精一郎に再挑戦。切っ先をやや下げたことで、精一郎の首の躲しを抑え、見事喉の下へ突きを決め、雪辱を果たす。再挑戦で勝利を得たものの、竹刀を合わせたことで精一郎の心技の奥深さを知った大石は、精一郎を敬崇し、各地の劍術師範や高名な劍士の入門を斡旋するようになる。

精一郎は三本勝負の他流試合では、必ず一本相手に花を持たせた。相手

さて、精一郎は直心影流の修練のほか、平山の道場での激しい撃劍の「真劍勝負」にも精進し、めきめき頭角を現した。精一郎の持論はただ一つ。他流と試合をしなければ劍技の進歩はない——その一点に集約されていた。

「他流の長所を取り入れながら自流の短所を補う。負けることを恥だと思ひ、自流の殻に閉じこもっているのは目先のことでだけに囚われた井の中の蛙である」
常々、そう口にしていた精一郎は、自ら進んで他流試合に向き、挑まれば受けて立っていた。



男谷精一郎の墓があつた江東区深川の海照山増林寺正門。左は増林寺会館。

やがて精一郎は団野の跡を継ぎ、麻布狸穴に道場を開く。文政六年(1824)、二十六歳の時だ。直心影流の正統十三世である。この道場から島田虎之介、榊原健吉などの劍豪が羽ばたいていく。

稀代の異能劍客 大石進との対決

江戸劍術界を震撼させる事件が起きたのは、天保三年(1832)であった。

精一郎の前に現れたのは筑後柳河藩の劍術指南役で大石神陰流の祖、

どに移転)。総裁方・久貝因幡守正典、池田甲斐守長頭のもと、精一郎も頭取に任命される。この時こそ男谷精一郎の「一大事」であつたらう。幕末動乱・幕府崩壊は止む無しとして、国家防衛の信念と獻策が実つたからだ。

酒を好み、酩酊しても普段と変わらず早起きし自邸を掃除。ついで矢場で弓術の稽古。雨日には読書や書画に時を費やす。四十八歳で妻を亡くした後も再婚せず独り身を通じた精一郎が満六十六歳で生涯を終えたのは元治元年(1864)七月十六日のことだった。辞世の句は、
うけたる心のかみ影きよく
今日 大空にかえるうれしき

亡骸は、江戸・深川の曹洞宗増林寺に葬られたが関東大震災のため行方知れず。よって墓はない。

百俵取りの小十人組から累進して御徒頭千石となり、講武所頭取兼師範、下総守を叙任し講武所奉行、西丸御留守居という要職も務め、三千石という異例の大出世を遂げた精一郎。劍のみにあらず時代を読み取る具眼。温厚で奥深く、肝の据わった気魂。それが「劍聖」と呼ばれた所以なのかもしれない。